

凡 例

1. 本書は、古代官衙遺跡の調査研究に関わる諸事項のうち、遺物や各種官衙遺跡に関する主要事項を取り上げ、それぞれの特徴や調査研究成果、調査研究上の留意点についてまとめたものである。
2. 本書は、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の中期計画に掲げられた事業のうち、「発掘調査及びそれらに関連する作業の手法・技術開発・改良に関する調査・研究」の一環として進めている「官衙遺跡発掘調査法の研究」の研究成果の一部である。
3. 対象とした官衙遺跡は、主に7世紀から10世紀にかけての時期のもので、宮城に代表される中央官衙、国府・郡衙などの地方官衙および官衙に関連づけられている遺跡である。
4. 執筆にあたっては、
 - ①官衙遺跡の発掘調査や資料整理・研究において必要な専門的知識や技術の習得に資するものとする事、
 - ②最新の調査研究成果・研究動向・課題を踏まえ、代表的な事例の遺構図・写真などを適宜掲載すること、
 - ③専門用語の説明もおこない、事典的な機能をも果たしうるものにする事、
 - ④必要に応じて、例外的な事例についても触れること、
 - ⑤必要に応じて、遺物の型式区分や遺跡の類型区分、それらの分布、変遷、性格についても整理すること、を心がけた。ただし、発掘調査の手引の類書に見られるような一般的な発掘調査法の概説については、必要なかぎりでは触れるに留めた。
5. 各章節の執筆担当については、各節の本文末に（）を付して氏名を記した。
6. 各原稿については、編集者が全体との関連で体裁を統一したが、各執筆者が用いた字句・用語の一部については、基本的には各執筆者の記述を尊重した。
7. 年号や用語などの表記は、特に必要な箇所以外は、新字体に改めた。
8. 本文中に引用した主要な地方官衙遺跡・官衙関連遺跡などについては、巻末の引用地方官衙遺跡等一覧を掲げ、遺跡名・官衙種類・遺跡所在地・調査報告書等（出典）を都道府県コード順に示した。
9. 図・表・写真について、既存の報告書・論文等から引用・転載したものについては、その出典を巻末の図版出典一覧に章節順に掲載した。また、関係機関等から写真の提供を受けたものについてはその旨を記した。
10. 遺跡調査報告書の編著者・発行所などの記載においては、〇〇県教育委員会→〇〇県教委、埋蔵文化財センター→埋文センター、のような省略をおこなったものがある。また、編集作業の省力化のため、地方公共団体刊行の報告書などの編著者個人名については省略し、原則として編集あるいは刊行主体の団体名を掲載したので、ご了承いただきたい。また、雑誌等の巻・号については数字のみとし、巻・号の文字を省略した。
11. 報告書などからの図の引用にあたっては、報告書などに掲載されている図をそのまま転載させていただいたものもあるが、再トレースしたもの、必要部分だけを抜き出したもの、アミかけをしたもの、文字を入れ直したもの、不要な文字を消去したもの、スケールや方位表示を変えたものなど、その図の趣旨を変更しない範囲で一部改変した場合がある。
12. 本書の編集は、埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室の山中敏史が担当した。
13. 本書図版の再トレース、作図トレース、絵図からの書き起こし、表紙図作成には、山本章代（奈良女子大学大学院生）の協力を得、写真撮影・焼付等には、牛島茂・中村一郎・井上直夫（奈良文化財研究所）、杉本和樹、鎌倉綾・岡田愛の協力を得た。本書編集における原稿整理・図版作成・校正などにあたっては、濱口典子、志賀崇（京都大学大学院生）、竹森友子（奈良女子大学大学院生）、高田淳子、千田一恵、山中千佳子、大高康正・瀧川亮（帝塚山大学大学院生）の協力を得た。

編集

山中 敏史 (埋蔵文化財センター)

執筆分担

石毛 彩子 (四日市市教育委員会)	X-6
大橋 泰夫 ((財)とちぎ生涯学習文化財団)	I-7、III-1～3
金子 裕之 (飛鳥藤原宮跡発掘調査部)	V-1～4
肥塚 隆保 (埋蔵文化財センター)	IV-6
小林 謙一 (埋蔵文化財センター)	IV-1～3
志賀 崇 (京都大学大学院)	V-5
進藤 秋輝 (東北歴史博物館)	IX-1
高橋美久二 (滋賀県立大学)	VIII-1～3
巽 淳一郎 (埋蔵文化財センター)	I-4・6、II-1～3、IV-4
舘野 和己 (奈良女子大学)	I-1～3・5
光谷 拓実 (埋蔵文化財センター)	IV-5
向井 一雄 (古代山城研究会)	IX-2
山中 敏史 (埋蔵文化財センター)	VI-1～6、VII-1～8、X-1～7